

---

# 忙しい未来

常盤夢人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

忙しい未来

### 【Nコード】

N9964F

### 【作者名】

常盤夢人

### 【あらすじ】

ある日、久信ひさのぶは、学校の帰りにおじさんの奇妙な言葉を聞く。翌日、TVをつけるとおじさんの言う通りになっていた。現状にあきあきしていた久信だが、ある理由でおじさんを見つけだし、未来を変えようと決心する。

## 序章

何もかもが嫌だから、昼まで寝ている事にした。

そんな事で、未来が変わるはずのないのは誰より知ってるつもりだった。

何かがおかしいんだ。でも、その何かがはっきりとした言葉では言えない。

春の心地良い風に吹かれて、1日前の出来事を久信はゆっくりと思いを出してみた。

朝は、いつもよりも早く起きられた。何だか時間に追われない朝はとっても清々しいものだった。

それから、朝ご飯を食べて家を出たのが8時少し前だった。なんとなく、いつもと変わらない久信の学校での日常が終わろうとしているた。

ただ、いつもと違った点が一つだけあった。帰り道に、奇妙な、いかにも怪しいおじさんに変な話を聞かせられた事だった。

話しかけられた時は宗教の勧誘かと思った。無視するのもかわいそうに思えたし、何より退屈すぎた。興味本位で、おじさんの話を聞いた。

そして、そんな事は忘れて昨日は寝てしまったんだ。

問題は、今日の朝だ。

いつもの様に起きて、TVをつけた。チャンネルを回したら、速報ニュースが流れてきた。

バカバカしいとその時は思った。

でも、もしかしたら、万が一って事があるかもしれないって思った。

ニュースが流れてきた。アナウンサーが興奮した様子で話していた。画面は、見なくても声の調子だけでそれは、分かった。アナウンサーの言った事が最初は、信じられなかった。

いや、正確に言うと言じようとしなかっただけかもしれない。

まとめるところだ、今日の朝に飛行機が墜落した。墜落したのは8時30分羽田発の札幌行きだった。しかも、機長の名前が斎藤だった。

そのニュースを聞き終わったと同時に、久信は凍りついた。

そして、全てはあのおじさんの言った通りだった事がゆつくりと分かった。

## 出会い

晴れた空とは対照的に久信は、あれこれと悩んでいた。

たまたまかもしれない。久信は、そう思う事にした。その方が良いと思ったからだ。

確かに、飛行機事故なんて滅多におきない。たまたま、おじさんが言った事が偶然おきたただけだ。

しかし、昼飯の焼きそばもあまり喉を通らなかった。身体は、現状を受け入れていないらしい。

気付いたら、母親に図書館で課題を終わらすと言って駅に向かっていった。やはり、空は晴れていてこれから、雨が降るなんて信じられないくらい爽やかだった。

しかし、久信にはどうしても確かめたい事があった。そう、あの時におじさんが言っていた銀行強盗だ。

今日の確か夕方方に襲撃される所までは、聞いていた。その先は、聞き流して帰ってしまったから分からない。

久信が到着した時はまだ、四ツ谷銀行の南青羽支店は強盗には襲われていないらしかった。

一応、店内に入ってみた。すると、女性が何やら支店長を呼ぶように話していた。多分、自分と同じぐらいの歳の女性だろう。

職員も困惑気味に対応しているのが、遠くからでも分かった。近くまで言って会話を聞きたい衝動に久信は駆られた。

「いい加減にして下さい。」

その時、職員が怒っていた。

「だから、何度言ったら分かるの！」  
女性も食い下がらなかった。

「これ以上、デタラメを言うなら警察を呼びますよ。」

「もう、好きにして下さい。」女性は、怒って出て行った。

「まったく、あんな客は困るよ。今日、強盗が来るだってさ。」  
さっき女性と応対した職員が同僚に文句を言っていた。

その瞬間、久信ははっと我にかえた。すぐに、さっきの女性を追い掛けた。先の交差点にいるのが見えた。まだ、信号を渡っていない。久信は、全力で走って女性まで追い付いた。ここ最近、運動してないせいで息はすぐにあがった。交差点の信号が赤から青に変わった時に、久信は話しかけた。

「すみません。」

「はい、何ですか？」  
女性は、警戒している様だった。

「あの、さっきの銀行でのやり取りを聞きました。」  
女性は、顔を赤くした。

「それで、何で強盗に襲われると思ったんですか？」  
久信は続けた。

「どうせ、信じないでしょうけど、。ある人が、言った事が現実になっているから。それで、あたしは、。」  
最後まで言い終わらない間に、久信は身が凍りついた。

「ちょっと、おじさんは他に何か言ってたのか？」  
急に口が動いていた。

「おじさん？何で知ってるの？男性だつて、、。」

その瞬間、女性もはっとして久信と目があつた。二人で数秒見つめ合っていた後、女性が口を開いた。

「ここじゃ、まずいわね。あそこの店に入りましょう。」  
言われた通りに、久信は喫茶店に入った。

薄ぐらい喫茶店は、非現実的な他人に聞かれたらおかしだろうと思われる会話を真剣に話すのには、格好な場所だと感じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9964f/>

---

忙しい未来

2010年10月17日07時18分発行